

◆ 評価極端…実像つかめぬ人物

天下を取る、という歴史的偉業を成し遂げた人間の周囲には、不可解で理不尽な死がつきまとうものです。

豊臣秀吉の甥、秀次もそのひとりといえるでしょう。長い間、子に恵まれなかった秀吉にとって、秀次は使い勝手の良い身内であつたようです。

それにしても、秀次ほどその人物評価が極端に分かれる人間も珍しいかもしれません。養子に入った三好康長の影響により、教養の名君とまでいわれたほどに文化面では功績を残し高い評価を得ています。ルイス・フロイスは、彼を「深く道理をわきまえた人で、謙虚で思慮深い」とか「万人から愛される性格」などと褒め讃えています。

一方で、異常ともいえる残虐性を持つていたとも伝えられ、誠に全体像のわかりにくい人物です。側室が30人もいたことを、叔父である秀吉が苦言を呈したこともあつたとか。あの女好きで知られる秀吉から注意されるとは、もしそれが本当ならフロイスの評価も違った色合いを帯びてきます。

秀吉が、淀との間にできた拾(のちの秀

頼)に後を継がせたい一心で、秀次を高野山に追放し切腹に至つた事実は確かだと思われまふ。しかしそれも、秀吉の命によるものか、幽閉を嘆いて秀次みずから選んだことなのかは、いまだ学説の分かれるところで、はっきりとはわかっていません。

◆ 近江八幡開町の祖

秀次の、もっとも大きな功績は、紀伊伊賀攻めや四国平定の軍功として与えられた近江八幡における町づくりでしょうか。驚くべきことに秀次は、この城下町で上下水道の整備に尽力するのです。

琵琶湖の水を引き込む運河を作り、防御のための堀としてだけではなく、運河としても活用しました。ゆえに、この八幡堀は大正時代まで商工業活動や人々の生活にとつて、欠かせぬ存在であり続けました。上下水道を整備することで、近江八幡の町づくりが成功し、水と自然豊かな城下町として、広く知られることになりました。近江商人は、このような水郷地を存分に生かした商業活動を行つていたのでしよう。

◆ 感染症を防ぐ都市整備

上下水道、つまり飲む水や排泄物の処理は、健康上きわめて重要なファクターです。

例えば、コレラなどの消化器系の感染症は、「水」が媒介になります。かつて貧しかった日本では、水の不衛生のために引き起こされる感染症でたくさんの方々の命が奪われていました。あるいは胃がんの要因のひとつであるヘリコバクターピロリ菌も、不潔な水や便から感染することを考えると、この時代に上下水道の整備に着目するのはまさに神業に近いことだと思えます。しかも秀次はこのとき18歳という若さ。もし、秀次が生きていたら、世の有様はまったく異なつていたのかもしれない。

高野山を訪れると、秀次が切腹した部屋を観ることが出来ます。これといった特徴のないさやかな和室ですが、時代と時の天下人に翻弄された秀次の哀しみをひしひしと感じることが出来ます。いったい、どんな夢を描いていたのか、今は亡きその人の本音を聞いてみたいくなり、しばし立ち止まったまま動くことが出来ませんでした。



う え だ み つ え
植田美津恵

首都医校(2009年4月開校)教授。医学博士、医学ジャーナリスト。愛知医科大学医学部客員研究員、日本未病システム学会評議員、日本思春期学会理事。著書「企業のエイズ対策」などの他、近著「戦国武将の健康術」も好評発売中。

